

目的 生活造形としての被服構成には、いくつかの制約が与えられる。人体に規制されその機能を奪うことなく美的表現が行なわれなければならないのも、そのひとつである。西欧の衣服が平面構成から出発しながら、どのような経過をたどって複曲面構成に移り、人体に対する抑制を加えていつたかを明らかにしたい。

方法 西洋服装史にあうられる代表的な「型」について、被覆の方法、構成の技術、下着の変化などを中心に、実際に復元を試みながら考察をすすめた。

結果 西欧における美の表現方法は、物のひとつひとつが三次元の存在として意識され、物の奥行き、あるいは「量感」として受けいれる感覚が発達していった。被服造形にも当然その美は投影されるようになり、さまざまなテクニックが必要となった。この衣服形態表現の技術のオ一は裁断の進歩にあり、オ二に下着——小くらませ、またはしめつける——の出現、オ三に材料の変化、オ四に衣服を実際に仕上げてゆく縫製技術の考案、オ五に工芸の発達と歩調を揃えた装飾品の考案などがあげられる。

人体の機能はその「型」の移り変りにつれて、あるとき、ある服種には尊重され、またそれと反対にあるとき、ある服種には殆んど考慮が払われなくなっていく。「型」の変化を求める感覚は、それがあまりに極限にまで追求された結果、人体に対する無視ともいえる抑制が加えられていった。